

障害者スポーツとは

障害者のスポーツとは、障害者のために特別に考案されたスポーツだけを指すものではなく、原則として健常者が行っているスポーツを、

- 1) 障害があるためにできないことがある。
- 2) 障害があるためにスポーツによる事故の心配がある。
- 3) 障害を増悪化させるおそれがある。
- 4) 競技規則が複雑なため理解しにくい。

などの理由でルールを一部変更して行っているものを指す。たとえば車いすテニスではスタートダッシュが健常者のように素早くできないことなどから、返球は2バウンドまで可能である。障害者スポーツも健常者のスポーツと同様に競技性の高いものからレクリエーションスポーツまでである。スポーツをするうえで大切なことは、スポーツを行うことで喜びを感じたり楽しんだりすることである。自分たちが楽しむために最も適したルールを参加する皆が主体的に作って、ゲームを行っていくことが重要である。そういった意味で障害者スポーツは創造性豊かなスポーツである。

障害者スポーツの歴史

障害者のスポーツは、紀元前から身体の変形などに体操を利用したり、中世以降では多くの医師が治療に医療体操を取り入れられていたようである。

障害者スポーツの急速な発展は、第2次世界大戦が多くの国に戦傷病者を生むことになり、そのリハビリテーションに苦慮したことがきっかけとなった。1944年、兵士の治療と社会復帰を目的に、ロンドン郊外にあったストーク・マンデビル病院内に脊髄損傷科が開設された。その責任者となったグットマン博士はリハビリテーション医療の一環としてのスポーツのトレーニング効果に着目し、脊髄損傷患者の治療にスポーツを積極的に取り入れ、筋神経システムにスポーツによる素晴らしい効果をあげた。グットマン博士は「スポーツは、健常者よりむしろ重度障害者にとり重要である。スポーツは治療上非常に大きな価値を有し、身体的、精神的、社会的リハビリテーションに重要な役割を果たす」と述べている。1948年ロンドンオリンピックの開会式の日病院内でスポーツ大会を開催、これがパラリンピックの原点となり1952年には国際大会(国際ストーク・マンデビル大会)へと発展した。

日本国内の障害者スポーツの発展は、昭和39年の東京オリンピックに引き続き開催された「パラリンピック東京大会」が契機となった。この東京パラリンピックの成功が翌年の第1回全国身体障害者スポーツ大会の開催につながり、また、(財)日本身体障害者スポーツ協会の設立へと発展した。平成11年には同協会に知的障害者も加わり、財団法人日本障害者スポーツ協会として一つに統合された。

天理での障害者スポーツ

天理では毎年4月～5月に障害者スポーツ大会が開催され、今年で28回目を迎える(平成7年は阪神大震災のため自粛)。第1回大会は昭和57年4月に、「健康感謝よろこびの集い(身体障害者スポーツ大会)」として、よのもと会主催で行われた。会

場の天理教校付属高校には参加者367名、係員163名、合計530名という大勢の方々が集まった。内容は飲み食い競走、かしもものかりもの競技、風船運びなど、参加者全員が楽しめるように考えられた種目であった。アトラクションやクイズ等もあり、参加者の感想をみると、手作りのとても暖かい大会だったようである。



第26回障害者スポーツ大会より 平成20年4月 天理大学袖之内第1体育館

第6回大会(昭和62年)からは「障害者1,000名おぢば帰り 身障者スポーツ大会」に名称が変更され、参加者、係員合わせてあと数名で1,000名に達するほどの大きな大会となった。第17回大会(平成11年)に主催が布教部文化体育課となり、翌第18回大会には、大会名が現在の「障害者スポーツ大会」となる。企画にも更にさまざまな工夫が見られるようになった。第22回大会は6月下旬の開催となり、梅雨時期の不安定な天候が予想されたため企画の段階から天理小学校体育館で開催を検討。そのため、競技の規模を縮小、数も減らして行われたが、翌年からは天理大学袖之内第1体育館で開催し、規模、競技数も以前と同様に行えるようになった。この年は第1回福祉フェスティバルの一つとして開催。以後、第25回まで福祉フェスティバルの1企画として開催。第26回大会から再び単独行事として開催。リニューアルの企画としてアリーナ全面を使用し、入場行進、オリンピックイヤーに因んで聖火の点火を取り入れるなど、大いに盛り上がったようである。

全27回の大会参加者は天候や行事の重複などにより大きく左右されるが、毎回600名前後、多い時では900名近い参加者があるほど人気のある企画である。競技種目も年々工夫が凝らされ、様々な障害に対応できるよう考えられている。ひのきしんや係員として参加した生徒や学生は、実践でのすばらしい経験をしているのではないだろうか。

私も実際に何度か見に行ったことがあるが、会場の熱気や歓声はとてすごいものがある。障害を持っている方、健常者に関わらず、館内全ての人々が一体となり、とても楽しそうに生き生きとしている。そして何よりも、一人ひとりのすてきな笑顔に感動を覚えた。これも企画をしている方々のきめ細やかな配慮、工夫、努力の賜物である。ひのきしんの精神をもち、大学や高校で福祉関連の学科もある天理だからこそ、この笑顔に出会えるのであろう。今年の障害者スポーツ大会の日程は、行事等が重なり9月の開催となる。今年もまた多くの方々の喜びの声が聞けることが楽しみである。このすばらしい大会をこれからも続けていただきたいと思う。

[参考文献]

Ludwig Guttman、市川宣恭監訳『身体障害者スポーツの発展—その歴史的背景— 身体障害者のスポーツ』医師薬出版、1983。
矢部京之助、草野勝彦、中田英雄編著『アダプテッド・スポーツの科学—障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論—』市村出版、2004。